

無目的のびがく

— ヨーロッパしゅうりがく旅行

越 田 稜

「女もすなるヨーロッパ旅行、男もしてみむとて
するなり。旅費は百万の破格にして行き合ふ人はま
た女なり」 トッサー・オクノ

赤そして運神

軽やかな驟雨がハイドパークの芝を淡く輝かしました。
美しくそして広大な公園には殆ど人影もなく、ただひとり
小柄な東洋人が夢想せる孤独な散歩者風を装い、白く
長くのびた小道を歩いていました。時おり遠く車のクラ
クションが乾いた空気に唱和していました。あのロンド
ンの雑踏のすぐそばに信じられない程の静寂が安心しき
つて存在するなんて……。勤め帰りか、ひとりの長身
の男が小道の反対方向から小柄な男に近づいてきました。
二人は立ちどまり、二、三ことばをかわし、又各々反対

方向に別れていきました。東洋人は池の辺りに立たずみ、
教羽の水鳥の戯れをじっとみていました。

(俺は何年間英語を学んだのであろう、何だつてアイ
・アム・アンダースタンドといわなければならぬのか)
小生の脇の下にじっとり汗がにじむのを感じました。

自分のホテルの行方が解らず、山高帽にこりもりがさの
紳士に道を尋ね、クウィーン・イングリッシュで親切に
教えられ、最後に口もとに微笑を浮べ、「アンダースタン
ド？」と念押された時のその答えに「アイ・アム・アン
ダースタンド」はなかるうに。

水面に映る短軀は必要以上にゆれ、そして茫漠とゆが
められました。ロンドンの雑踏を小幅に内股にこせこせ
歩き、身が文字通りちぢむ思いで、やけのやんばち、地
下鉄にもぐり込み、とある駅で止むなく押し出され、ひ
よんな具合にハイドパークに浮び上り、とにかくぼつと
したや否や、あの紳士との拙き会話。一羽の水鳥が小生
の眼前でケツをみせ、羽ばたき乍ら水中にもぐりこみま
した。

ロンドンには各々短期間とはいえ三回ばかりやつてき
ました。小心者の小生には、多少「外国」に慣れたとは

いえ、いつも乍らおどろおどろしく街を歩かねばならなかつたのです。それでも今春（七四年三月）出かけた折り、街をほつつき歩いて今さら乍らささやかな発見をしました。以下その発見伝を少々。

古都ロンドンの路は周辺部ではそうでもありませんが、中心部ではかなり複雑に錯綜しており、その狭く曲りくねつた路をあの赤い二階だてのバスが、日本の乗合バス以上に排気音を轟かせ横柄に走りまわっています。そして駆逐艦的にあの黒つぽいおかま然としたタクシーと小生の大好きなトライアングの乗用車が、赤い戦艦の左右をすりぬけるが如く走っています。ついで乍ら、赤い二階バスは七十年代終りまでには廃止されるそうで、二階に上つて煙草をくゆらし路行く人を見下す楽しみはもう無くなつてしまふようです。何故かは小生の語学力では到底解る範圍ではありません。さてその走る凶器赤と黒の前後をこれ又ロンドンつ子達が（いやかつてロンドンつ子であつた人々も）何の危機感も抱かせないように入すいといすりぬけていくではありませんか。交差点（大低の場合路は五本も六本も交錯しています）です。勿論交通信号なるものはあり、青黄赤のローテーションは万国共通ではありませんが、人々は赤だから

といつて正面をしかとみて馬鹿面してじつと待つてゐるなんてことはしていません。車の往來の隙をみてさりげなくひようひようとは横断するのです。車の方だつて別に車窓から手を出して後方の車をとめて歩行者優先道徳を奨励している「町の名ドライブアー」よろしく徐行かつ停止するなんてことはありません。全てがうまく流れてゐるわけです。急ブレーキの肉感的金属音なんていうのはまず聞かれません。偶にあつてもそれはおそらく小生が生意気にも冒険をし、そしてしそこなつた時ぐらいでしよう。日本人の何人かの観光客が団体で一斉に手をあげて横断しようとしたら、タクシーが何台も近づいて停つたという笑い話があるそうです。ロンドンでは交通信号は車のためにだけあるそうで、歩行者は身の安全さえ自分自身で確保されれば、威風堂々路を闊歩していいようです。例外的にガードレールがどこに置かれてゐる場所もありますが、日本みたいにはつちり気が遠くなる程長いガードレールはありませんし、街の美観をそこなう歩道橋もありません。もつとも美観をそこなう程の街もありませんが。要は運動神経の問題のようです。

このすりぬけの妙の他にもうひとつイギリス人の運神度合に感心したロンドンの街での一見聞。又赤い二階バ

スの話ですが、あのバスの後方に乗降車口があるのですが、そこにはドアがなく、柱が一本たよりなくあるだけなのです。そして飛び乗り飛び降り自由でロンドンっ子は、いやおばちゃま達でも、その柱をソフトタッチに掴み、走っているバスに飛び乗ったりしているのです。まさに軽快にそれをやっつてのけるのです。車掌（大低男）は無感動にその動作をみているだけなのです。小生も一度「バスに乗りおくれは」と小生者にありがちな虚栄なる強がりから又々冒険を試みたのですが、悲しいかな柱を掴む筈の手は空を握り、小生の全動作を眺めていた無感動な車掌に同情の眼ざしのひとかけらすら投げてもらえなかつたのです。要は運動神経の問題のようです。

十八世紀産業革命による機械文明の発達については走る凶器の出現となり、人類の安泰に脅威をもたらした、なんていうことが囁かれているようですが、どうしてどうしてこのロンドンの街では決して車は凶器でなくやはり文明の利器にまだ落着いているようです。そしてそれはまさにロンドンの人々に培われた、こしあんの如き運神によるものではないかと思考するのです。ココロラのプラグマティズムでないブランドイ的なそれが今なお息づいているようです。又そのような運動神経は文字通

りスポーツについてもいえそうです。サッカーにしろラグビーにしろ、どうも日本がイギリス（広くヨーロッパ）に勝てないというのも、あの路上におけるすりぬけの差ではないでしょうか。いやいやスポーツの問題だけではないようです。運神、しかもわか運神でない運神、を素質としてもつということはやや飛躍のかつ大袈裟にいえば、ものごとの正しい認識への重要な技術をもつということではないでしょうか。本当の頭の良さというものはこの運神がともなつてこそいえるのではないのでしょうか。イギリスでは地下鉄のことはアンダーグラウンドといい、サブウェイは地下道のことをさします。サブウェイを地下鉄と思ひ込み、地下鉄に乗らんとして道の反対側にひょっこり現われるなんて、まるで喜劇です。いや悲劇的語学の運神のなさでもないえましよう。かくいう小生のロンドンの街での哀れにもいたわしい姿だつたのですが……。

日本は明治以降、にわか運神のため数々の悲劇を味わわれました。その結果ついにはガードレールなどという味わいのないしろものつきの街づくりに専心してしまつたのです。ロンドンとの伝統的ギャップを何もガードレールで補う必要はないのです。ガードレールなどという

過保護的な安全装置があるばかりに、ドライヴァーさえも安心しきつて怠惰なハンドルさばきになってしまふのです。過保護でない、寡保護な心構えこそ必要なのではないかと思うのです。

旅そして挑発

過保護でない、寡保護な心構えこそ必要なのではないかと思うのです。それはバリにあるユネスコ本部でのある出来ごとにつくづく感じたことなのですが……。そもそも今春ヨーロッパに出かけたというのは、日本ユネスコ協会連盟（いわゆるユネスコ傘下の「社団法人機関」主催の「高校生のためのヨーロッパ移動講座」に参加した高校生数十名をひきつれていくためだったのです。いわゆるヨーロッパ修学旅行の引率教員の役目を小生が負ったということ。この「講座」も今夏で四回目だそう。小生はそのうち二回目、三回目、日本全国から募集した高校生をしかめ面してひきつれていったわけです。約半月間ヨーロッパの各地を遍歴し、数か所で例えば辻邦生、阿部良雄、桑原武夫、柳宗玄、野上素一ら各界のえらい先生方の講義があるという仕組で、特にユネスコ本部ではユネスコの協力で映画会、講演会がにぎにぎしく催さ

れることになっていきます。小生は、というところヨーロッパをあちこち移動する際のバスの中でガイドよろしく「あれがレスピーギのローマの松だ」とか「あの二階にシヨパンとジョルジュ・サンドがいた」とか「この橋で『哀愁』のヴィヴィアン・リーが自殺した」とか語りをしてお茶をにごす役目を果たしたわけです。

さてその出来ごとというのは小生がもっていた班とは別のあるグループで起きたハプニングなのですが、こういうことらしいのです。ユネスコ本部の国際大会議場で「講座」の中のメイン・イベント、ユネスコ委員の講演のあった直後、一男子高校生がその辺にあつたユネスコ・ピー・アール用のパンフレットの束を巨匠ピカソの手になるかなり巨大な壁画に投げつけたのだそうです。パンフレットはピカソの絵の如く不調和なるアンサンブルをもってヒラヒラと廊下に舞い落ちました。顔面蒼白となつた某引率教師がその高校生を叱責・譴責・懲戒の対象にしたのは勿論のことです。察するに（いや小生もその高校生の気持が解るばかりに察し易いのですが）彼はユネスコ委員達の話し、或は映画にもられた美辞麗句の羅列に虚妄の正義、虚構の大義を感じ立腹したものであるのです。不能なる国際連合の免罪符ユネスコ

に彼はピカソを介して抗議したわけです。小生も実はユネスコの矜持する平和的非政治活動の非平和にイライラしていたものです。ところが「講座」の反省会がひと月ばかりのちに東京で開催された時、くだんの某教師が今度は顔面真赤にして、抗議せる高校生の許されざる行為を非難し、まさに日本の恥とばかり口角泡をとばし、今後の「ヨーロッパ移動講座」参加者は厳選し、かつインターナショナルなエチケットを身につけさせるべきであるとして力説したのです。小生は反省会で出されていた中華料理に急激なる食欲減退をもよおし、思わず嘔吐感に悩まされました。この教師感覚による国際的場におけるエチケット要請こそ過ぎたる生徒に対する保護ではないでしょうか。大体海外旅行に出かける前のエチケットなんていうのはせいぜいビデで大便をたれるな程度で充分です。特に海外に出た若き生徒達のものごとに対する眼のみはり方は実にストリートなものです。それを外国人の手前、エチケット云々なんていうのはいかにもその場を繕う教師的礼儀作法でしかありません。パンフレットの乱舞に驚嘆するユネスコ委員にまあ一見気まずそうな顔をして「バルドン」と冷やかに呟き、あとはあの一高校生のストリートな国際感覚を誉め称え、育てるべく雅量

を持つべきだと思いのです。「ビデ」程度の寡保護にとどめ、要らぬ過保護的エチケット教育は勇気をもつて捨てるべき心構えこそ必要だと思いました。

それにしても遠く故国を家出した若き「かもめのジョナサン」達のヨーロッパの旅での行動をみていますといじらしくも又羨ましい気持ちになります。たらちねの母の懐中より出でた高校生のあの自由奔放な活躍ぶりを眺めていると、小生が旅立つ前俤そうに「君はどんな目的でヨーロッパへ？」と問うた時、クルルに「いや、何となく」と答えたあの人物と同じ奴めがと眼をみはりたくなつたものです。ここ数年本校(学習院高等科)でもそうでしたが、各学校で修学旅行の是非が論議される時必ず大手をふつてもつともらしく出るあの一見正当論「現行の修学旅行に何の『意義』があるのか?」は全く無用の討議でしかないことをあらためて感じました。『意義』ある旅行をなんて考えるのは教師の思ひ上がりで、生徒自身は一步でも羊水の分泌液のひたたりから脱出出来れば「何となく」感じている旅から存分の彼等自身の意義を見出す筈です。「旅」(＝家出)から得た効果を早急に求めるなんていうのは教師の早漏癖とでもいうべきものです。口やかましくいわなかつたせいもありましようが、

いわゆるポルノ解禁のドイツのフランクフルトのセックス・ショップ、大人の時間と場所では半解禁のパリのピガール通りのセックス・ショウに立ち寄つた高校生の好色談に、又ひそかに深夜までロンドン某劇場で催されていたロック・オペラを観たりチロル地方でやはり深夜までワインを飲み乍らヨーデルを聞いたたりした高校生の感激談に、いたく彼等の真摯なまでの若々しさと真面目さを感じたものです。ついで乍ら好色家であり、感激屋である小生が彼等の前後に暗躍として出没したことはいうまでもありませんが……。シェークスピアとワグナーとトーマス・マンとストラヴィンスキーが何らかの共通因数をもつて同居している水の都（まさに水の都であり、実際にあの地に心が触れなければ絶対に語り得ない）ヴェニス、そのヴェニスの大運河に漂う水上バスの手すり、又ある時はヴェニスの細やかな路のまろやかな石畳みの上で、彼等男女高校生は遠くサン・マルコ広場から聞こえてくる音楽に怪しくかきたてられ、ただただ酔い痴れ羽化登仙の心境のようでした。月あくまでもまるく明るく、路あくまでも狭く暗く、織り成す男女のクールなしがらみに、小生は何故かさめたおセンチメンタル。ジャーニーの一匹旅がらすのようでした。若きカップル

達は今なおその「不純」でない交際を続けているようです（後日綺譚）。

同行した男子高校生の殆どは御多分にもれず長髪族でしたが、その中でひとときわ長く、その上指輪、首飾り、腕飾りをした一高校生が旅行中の小生にとつて、そこはかとなく気になる存在でした。門限（一応定めておいたのですが）には常に途方もなく遅れても、翌朝の全員集合には必ずといつていい程トップに現われる奴、バスの歓談でシェーンベルクを語り、ミラノのトスカニーニの墓前では観光客まる出して写真をとつて貰つたかと思つたと、バスの中の歌の会では猥歌をがなり、ホテルの小生の部屋にいくらか赤い顔をして闖入してきては文明論と教育論をぶつという御仁。旅行出発前ふてくされていた彼のヨーロッパでのひたむきなものを探る眼に小生は一種の感慨すら覚えました。それでもある種の御仁達は彼の長髪を切らねば気が落着かないとでもいうのでしようか。かくいう小生もそうなのですが、あの長髪に挑発され、とかく身構えるのは常に大人達であり、目白台御殿の田舎殿様のそれは論外としても、やたら「今の若えもん」に対する德育論をそれこそ大人気なく強（狂）張するなんて全くナンセンスのようです。もつとも「若えもん」

に対し長髪に對することに限らず、いかにも自由人面した教師の姑息にして狭量な善意にも鼻持ちならないことはいうまでもありません。そしてついでにもうひとつもつとも痛感するのは彼等若者達が時にはまるで無氣力で、残忍で、裏切者であるということです。でもそれはそれでいいじゃないでしょうか。イマニュエル・カントを狂わした教育者ジャン・ジャック・ルソーの像のあるレマン湖畔で、一向に狂うことなく前夜の疲労をいやしバスの中でだらしなく眠りこける高校生達に何を咎めることがあるでしょうか。シャモニーへ疾走するバスの中で小生はそつと、なだいなだの『娘の学校』をとり出し、若者達の健やかな寝姿をじつと眺めたものです。

骨そして屈辱

小生は、若者達の健やかな寝姿をじつと眺めたものです。それにつけてもむしろ眼をぎんぎらぎんとさせ、させ乍らも何か虚ろなそして眼やにのたまつた眼ざしの一群のくたびれ果てた大人の日本人達の態度は一体どうでしょう。パリ・オペラ座通り付近、チューリッヒの時計店の前、トレビの噴水のかたわら、バッキングラム宮殿の鉄柵の前、ルーブル美術館の大理石の階段で……、

黒いスーツと身につかぬ装束の猫背の男達女達。とりわけ目立つのは農協バウアーとおらがセンサー達の群れ。小きざみに移動せる大和民族はある時は札束をある時は微笑をふりまき、ヨーロッパの名所旧跡にそしてお店の前に整然とたむろしているのです。そしてそれらグループが街で各々交錯した時のその瞬間に漂う不条理な妖氣、せい一杯に照れを隠し互いにしらぬ顔を装いつつも大いに意識している各人の冷やかな一瞥。インターナショナルイズムを誇示するそのけだるいウルトラ・ナシヨナリズム。小生自身実はこの筆舌しがたい感情に何度かさいなまされたものです。一団の交わりではありませんが、たが、サーヌの辺りをひとりそれはきざに漫歩していると、ふと小生と同じくきざな日本女性が向うからやってくる、そして行きちがう、とたんにサーヌは神田川か隔田川となり小生の胸裡にはメタンガスが充滿し、まるで白けた気分になつたものです。その点ヨーロッパに出かけた若者達のさりげない自然の振舞いはどうでしょう。しかしいづれにしても我等日本人、とりわけ戦前に生れ出でた日本人の醜さには特にシャンゼリゼー通りなどで被害妄想でしようが何故か身がちぢむような思いをします。いくらダブルを着て胸を張つても常におじぎして

いるように見える日本男子、実はそれだけが取り柄だと自負しつつ、かつヨーロッパ人には大方無視されている「カメラ」をぶらさげている日本男子、きまつた場所できまつた行動（写真撮りと買物）しか出来ない日本男子、ホテルのロビーで何十年ぶりの再会を喜ぶが如き仕事をして、歯ぐきまる出し、品なく笑いしやべる日本男子、やたら母音の多い「えいご」を相手がどり思っているか意に介せず、しゃべり（？）まくっている日本男子、そしてそれら日本男子に寄りそひつついているのが、胸あくまでも薄く尻あくまでも低く骨格あくまでも貧弱なる傾国の醜女達。ミロのヴィーナスに端をひらく美の概念はヨーロッパ人の大變なるアバルトヘイトだと思ひ乍らも、いとも簡単に大和民族として生れし悲運をつい嘆かざるを得なくなるような日本女性達。

小生はせい一杯抵抗し、同行の高校生達と他国の觀光客でさえも余り足向けない裏街やいわゆるスラム街（ローマなどでは一寸奥へ入れればよくみかけられますが）や、一般の觀光客が余り利用しない地下鉄に存分乗つたりしました。買物にしても、ふところ具合にもよりませんが、まず時計店やカメラ店や一流デパートなどは避け、スーパーマーケットや町はずれの文房具店、雜貨屋に立

ち寄つたりしました。又弱腰の外務省がついには輸入をみあわせたという映画『パリの中国人』を觀にもいきました。そしてそういうところで間々逢う日本人は大低はジーパン姿の堂々とした若者達でした。一瞬日本人としての屈辱感を解消することが出来たものです。彼等こそヨーロッパの偉大と偉大でない部分とを感性的ではあつても直視出来るのではないかと考えてみたりもしました。それは江戸末期の開国以後、福沢諭吉、漱石、荷風達のもつたヨーロッパ文明觀、大正期閉ざされた開国以後、芹沢光治良、藤村、大杉栄達のもつたヨーロッパ体験、又敗戦による第三次開国以後、森有正、檀一雄、辻邦生達のもつたそれ等と違つた何ものかを彼等はもち、日本人による新しいヨーロッパ価値觀が、やんわりとではあつても強力におし出されてくるのではないかと思つたのです。そして実は六十年代半ば以降海外旅行自由化により津波の如くヨーロッパにおしよせた農協パウアーを代表とする我等恥辱的大人達も含めてこれら日本人は、ひよつとするとその新しい価値觀創造へのさしみのつま位にはなつていのではないかということもひそやかにあります。少くともある種の日本人達よりはるかにましな存在として誇つていいような

気がするのです。とかく胡散臭そうにヨーロッパに来て
いる日本人観光客を眺め、彼等にいわせればその間抜け
な所作を冷笑しているある種の日本人達、同民族であり
乍ら決して彼等観光客とは異民族の立場をとろうとして
いる自称国際人、そんな彼等よりはるかに日本を代表し、
かつヨーロッパを知ろうとしている愛すべき日本人では
ないかと思うのです。そのある種の日本人とは今度の旅
行でもときたま逢いましたが、例えば国際機関に務めて
いる日本人、各国日本大使館に籍をおく日本人、そして
大手商會社で猛烈ぶりを発揮している在外日本人達で
す。たまたま語学に強く、いや語学だけに強いばかり
にこれみよがしに我々のエルとアールの発音の違いに或
るいは違いのなきにけちをつけ、一般日本人観光客を侮蔑の
眼ざしで眺めている日本人達。我々と逢うとまるでテレ
ビの外国劇映画のふきかえ調に日本語をしゃべり、きざ
つぼく手をひろげる御仁達。ああいう無国籍的な日本人
達に比べれば、腹まきから金の勘定をする日本人達の方
がよっぽど日本人らしいのではないでしようか。その素
朴な態度こそヨーロッパ人にみて欲しいと思うのです。
少くとも小生は小生自身の気持をあらため、最近はとく
にそう考えるようになりました。猫背日本人大衆よ、こ

ぞつてヨーロッパに団体探險旅行をしましょう。そして
在外日本人エリート達の妙ちくりんな不遜ぶりに尻でも
かけてやりましょう。そしてヨーロッパ人から与えられ
ている汚名(威名)エコノミック・アニマルの元凶は、
実は同民族をも欺いている彼等日本人の代表人面をして
いるエリート達であることをヨーロッパに教えてさしあ
げましょう。どうせ我々一般の日本人のエコノミック・
アニマルぶりなんてせいぜいドメスティック・アニマル
程度でしよから。

城そして昼寝

我々一般の日本人のエコノミック・アニマルぶりなん
てせいぜいドメスティック・アニマル程度でしよ。そ
んなドメスティック・アニマル(家畜)を飼育するエコ
ノミック・アニマル(商會社社員達)、そしてそのウ
オッチ・ドック(番犬)外交官達)のアニマルぶりに比
べ、より上わ手であり、合理的であり、華麗でさえあるの
がとくにイギリス人を代表とするヨーロッパ人ではない
でしよか。最近とくにそんなふうに感じました。

エリザベス女王の執務官殿であるバックingham宮の
いわゆる衛兵の交代にはわんざと観光客がおし寄せ、古

色蒼然たる鉄柵には、愛すべき日本人猿のよじのぼらんがスタイルもよくみかけられました。軍靴の乾いた音と共に、リーダーのさめたかけ声。それに加え奏でられる吹奏楽の調べ、それはブラームス、チャチャチャからサクラサクラ、木曾節まで何でも三百六十五日毎回目曲が違ふとのことです。当然乍ら「交代」の儀式は整然にしておごそか、後方に厳然と建つ宮殿にふさわしいものでした。失礼かとは思いましたが、ごく近くに寄り衛兵達の顔色を各々うかがえば（あの長い帽子をまぶかにかぶっている）、みんながみんな女王に忠誠を尽しきつたきびしい顔つきをして行進をしていました。さすがは伝統ある王国だといつづく感じがたつたのです。女王の居城であるウィンザー城はロンドン郊外イトンの町の中心にどかんと聳えておりました、そこでも衛兵（ネパール兵）があり「交代」の儀式はやはりおごそかでありました。又ロンドンの旧市にある「倫敦塔」のそれもミニチュアでしたが、小生はバックingham宮に抱いた時と同じような印象をもつたものです。いやヨーロッパに残る王国のしかるべき場所の衛兵達みんなに同印象をもち、王国と王国民のしかるべき絆を感じました。日本の皇宮警察や自衛隊の儀仗兵

では伝統と貫禄で一歩も二歩もゆずらねばならないのではないかと思いました。

ところがこんな話しが最近あつたのだそうです。バックingham宮の若き一衛兵が女王に手紙を送り「恐れ乍ら厳寒の折りはどうぞ番兵の役目、御容赦を。それにリチャード三世みたいなひといませんし衛兵はいらぬのでは」と。それに対し女王は「連日御苦労に思うぞよ。確かに衛兵必要の時代ではもはやあるまい。しかれどもあなた方の『交代』を頼に万国から人が集まる。王国繁栄の為に忍び難きを忍び、耐え難きを耐えておくれぞ。せいぜい豪雪の折りは衛兵控え室でブルーフレームにでもあつておくれ」と返事をしたためたといふことです。

小生はこの話しかつてエリザベス女王がビートルズの稼ぎに勲章を授けた時のことを想起し、まさに彼女のエコノミカルぶりに感じいりさせられました。衛兵達の忠誠を誓つた眼に、イギリス王国の伝統と威厳をみた小生は素直にその偉大さに敬意を表したのですが、何のことはない、女王陛下にまんまと欺かれたわけです。あの衛兵の「交代」は当然觀光資源であり、あつたり前のことではないかといわれそうですが、そいつを全く忘れ去り、かつ感じさせない華麗さが、整然たる行進と衛兵達

の生真面目な眼にあつたのです。そういうえばパッキンガム宮殿の正面に長く続く広い路（バレード・ロード）は女王家の私有道路で、そこを通る人と車からは入場料をとり、それは直接女王のポケット・マネーになるんだそうです。確かにちやつかり、かつがつちりしています。そしてエリザベス女王を象徴として、おしなべてイギリス人全体が、かつての経済大国を今なお誇りとし、来るべき次の繁栄の日々を少しも周章せずじつくり待ち構えているが如くに見えるのです。鉄柵の外に群がる各国観光客の大観衆の前で衛兵達はきつとそう考えて、虚しくさえ思われる「交代」の儀式を律気にやっているに違いないのです。

さてそのイギリスでもそうですが、ヨーロッパ各地を旅行した日本人なら必ず感ずることではないかと思いますが、彼等ヨーロッパ人は働く時と休養する（遊ぶ）時とを大変はつきりわけております。働く時は無駄なくせつせとやり（そして儲け）、休む時はどんなに儲かりそうな話があつても排除して遊ぶ、そんな彼等の習癖があるようです。春期はそれでもありませんが、夏期（日本よりはるかに暖き易い夏ですが）などは軒並に店が閉っています。土、日曜といくら観光客が大挙してたむ

ろしていても鉄格子が重く下がりがり、真昼間はいくら繁華街でも完全に寝静まつた感じになります。実際彼等の多くは昼食にワインを飲みぐつすり白河夜船ならぬ白河屋船をきめこんでいるようです。真昼間馬鹿みたいに元気よく小股にちよこちよこ歩いているのは多くは我ら日本人であり、それに群がるヨーロッパ以外から出稼ぎに来ているおみやげ屋位なものです。確かにヨーロッパといつても国にはよりますが、概していえば、必要以上にあくせくと働かないようです。夜遅くまで一日中店を開いている商人、時間外手当を貰つてゴルフ道具を買おうと質上めし上げてしまふ経営者は、どうやら先進国では日本位のものではないでしょうか。働き蜂による無理した資本蓄積、そしてそれによつて国民総生産が上つたからといつて自慢になるでしょうか。最近どうやら遊び時間を覚えた日本人、働く時間がヨーロッパ人と同じになつた時、それでも日本人がエコノミック・アニマルといわれるでしょうか。現在日本人のことをエコノミック・アニマルだと称しているヨーロッパ人は昼寝をし乍ら、やがてはおいらが遊び上手なエコノミック・アニマルで、やつらはたかだかおいらのドメスティック・アニマルじ

や、なんて考えて夢でほくそえんでいることでしょ。とにかく彼等の態度には何か堂々とした華麗なるエコノミカルぶりを感じます。

墓そして女房

とにかく何か堂々とした華麗なるヒストリカルぶりに感じます、ヨーロッパの国々にそして各々の街々に。地方の都市や村にまで到底時間（と費用）がなく出かける余裕はありませんでしたが、いわゆる観光都市の名所旧跡にヒストリカルぶりをいたく感じさせられました。以下そのうちのいくつかの感銘記。

パリ・シテ島（セーヌ川の中洲）にあるバック・シャンなノートルダム寺院はいうまでもなくゴシック建築のシャンな大寺院ですが、この寺が十二世紀に建てられ（完成は十四世紀）今日なお美の対象として存在するのみならず、教会として実用されているのには、ただただ感嘆せざるを得ません。これからも半永久的に続くであろうノートルダムの長い歴史の、たつたひとこまに小生がちょこつとのつかっているかと思うと怪しげな戦慄すら覚えるのです。そして残照輝く夕暮れ時ひとりぼつんと薄暗いこのノートルダム寺院の堂内に入り、おりしも演

奏されているパイプオルガンの音を聞くにつれ、小生は完全な恍惚状態になりました。この寺のオルガンの音はフランスにある他のそれに比べると相当劣るんだそうですが、それでも小生には胸にぐつとくるものがあり、頰の裏側にはふんわりしたほてりが広がってくるのを覚えました。残念乍らこれはオーバーな表現ではないのです。（こういう感情の襲来はロンドンのパレス劇場でロック・ミュージカル『ジーザス・クライスト・スーパースター』を観た時にもありました。）曲目はさっぱり知りませんでした。いや誰の作曲でもいいのです、どうせ作曲家の二、三百年の差はこのノートルダムでは完全に消えてしまいうです。数曲演奏した若き長髪のオルガニストは簡単に一礼し「アンコール」の声も無視し堂内の暗やみに消えてしまいました。興奮せる小生のかたわらで若きフランス人でしょうか、中腰しておそらくフランス語でお祈りをしていました。みせかけでない装厳さ、今なおバリの人々の懺悔の場であるノートルダム寺院。思わず拝観料をとられるのではないかと思つた小生の悲しいばかりの浅ましい習癖。

やはりゴシック建築の代表的な大寺院ウエストミンス

ターは旧市（シティ・オブ・ロンドン）の文字通り西方にあります。やはり古く十三世紀に建てられたこの寺の聖堂の床下には、アンチ・キリスト教的だということで嫌われはしましたが仕方がなくも埋葬されたというニュートン、ダーウインから始まり、チャーサー、ディケンズ、非行青年バイロンにいたるまでの文学者達、又百二十五才までアルコールにひたつていたトーマス・パーソン等の遺骸があり、故人達は大いに足蹴あしげにされ踏まれることを喜んでゐるそうです。小生も心おきなく床石を踏みつけて故人達を偲びました。この被虐的とも思える埋葬法は例えばフレレンツェにあるサンタ・クロッチェ教会の聖堂等にもみられ、ここでも小生はミケランジェロやマキアベリヤガリレオ達の墓の上を足で必要以上に踏みつけ、故人等の偉業を思い浮べました。厳肅なる寺院の中での故人達との親しみある再会、何か歴史の流れをどつかでぶつ切り切るのではなく又故人達をそれ故やたら英雄視するのでないヨーロッパ人のある歴史観を垣間みたような気がしました。しかも教会という装飾にみちた存在がひとつの骨董品としてではなく、又単なるシンボルとしてではなく、今なお人々の生活の具であるという

ことに、羨望の念すら禁じ得ないような気がしたので。小生みたいな観光客の大襲来を受けても、ゆるぎなく、地元ヨーロッパ人は自分達の生活の場を自信をもつて解し、むしろよそ者達をすら彼等の生活の中に包含してしまわんとする深遠なる意図があるのではないかとさえ感じました。

偉大なる骨董品にして偉大なるシンボル中のシンボルであるかもしれないサン・ビエトロ寺院にも同じような感じを抱きました。ヴァチカン市国に聳え立つこの寺（十七世紀完成）が例の宗教改革の直接原因になったなんて、とうに忘却の彼方に押しやるような、あまりにも馬鹿でかく、又馬鹿さらびやかな大建築です。カンリックの居なおりが、こうまで堂々としているともはや何をかいわんやの気持になります。いやそれどころか思わず敬虔なる信者として膝まずきたくなるような心境です。そしてこの大聖堂をうずめ尽す各国の僧侶達によるミサを想像するに、まさにそれは儀式中の儀式であり、儀式の属性としての無味乾燥さのかけりひとつない内容の富んだ、つまり人間の心身の直接の表現としての儀式に思えるのです。装飾さの中にある、ある軽快な人間のヴァイタリティー、そんなものをこのサン・ビエトロ寺院に感

じました。ヨーロッパの人々が宗派を超えてこの大教会にやつてくるわけが解るような気がしました。

サン・ピエトロ寺院の正面から入つて直ぐ右奥にこの寺院の一設計者でもあるミケランジェロの大大理石像『ピエタ』があります。十字架から降ろされた我が子を憂愁にみちた眼で抱くマリアの若き美しいその表情、それはこの世に存在する全女性を全て醜女にもし得る女らしさ美しさでした。故にこの世に存在する全男性が惚れざるを得ない女性像であり、そして虚しく惚れ得ずして止むなくどんな女性を女房としてもあきらめ得るような、そんな美しさを『ピエタ』はそなえていました。小生の人生における最大のピエロ的失敗を何といとも簡単に解消してくれるのでしょうか。サン・ピエトロ寺院のにつききサーヴィスにますます実生活に密着したその華麗なる装飾さ、ヒストリカルにしてヒストリカルでない流れを感じさせられてしまいました。

しかし、しかし乍ら小生がヨーロッパで得た数々のヨーロッパの偉大さ、それは決して今なお否定する積りはないし、又否定出来ないにしても、かといってヨーロッパにこのまますがり、それを範としてこれから生きよう

うとするには、あまりにも数々のヨーロッパ自身の苦悩とそれにとまらぬ没落意識が多くあり過ぎるようにも、ヨーロッパを旅して上べだけかもしれないませんが感じさせられました。『ジーザス・クライスト・スーパースター』でジーパンをはいたユダガ、古代の服装をしたキリストに向つて「何をあなたは我々に求めるのですか」と叫んだ悲痛なる問いかけ、そしてあのミュージカルが若者達に大変共鳴されたという事実、いかにもヨーロッパ統合が明日にでも実現されそうで実はアイルランド問題やイー・シー問題に象徴されるいがみあうヨーロッパ各民族間の葛藤、石油危機に端を発したアラブへの、そしてユダヤ人への問題とその歴史的責任、アメリカ、ソ連いや日本に実のところ物質的に差をつけられたところからくるいらだち、……物心両面からの「西洋の再没落」に大寺院から聞こえる鐘の音が何故か軽快であつても弔鐘のようにも間々聞こえ、培われた運動神経も、ただ老後のクリケット遊びの準備体操のようにも又みえてくるのを一方では感じました。ヨーロッパの苦悩はきつと深いものに違いありません。

春そしてエピローグ

ヨーロッパの苦悩はきつと深いものに違いありません。その苦悩を寒々と感じたのはロンドンでもなくパリでもなく実はイタリアの花の都フィレンツェでした。現代のヨーロッパの苦悩の原其点はルネサンスの発祥地フィレンツェにあるのではないかと。

イタリア中部トスカナ地方にあるフィレンツェはむしろ小さな街でした。淡い褐色の屋根に明るく太陽の光りがあったり街全体が美しい花のようになり、起伏のゆるやかな周囲の丘の緑がやさしくその花をつつんでいるようにでした。ミケランジェロが、羽仁五郎がこよなく愛したフィレンツェ、小生もこの街にいたく愛着を感じ、中世がそのまま残る狭い路地やアルノ川にかかる古橋のたもとをベアトリッチェを捜し求めて歩いてみました。

しかし昨年夏の夜でしたか（やはり「移動講座」で出かけたおあり）さんさんしつとりした中世を肌で感じ乍ら歩きくたびれ、ヴェッキオ宮（市庁舎）の前のシニョリア広場の野外喫茶でなま音楽をさかかにビールをひとりで快く飲んでいた時、ふと胸に鳥肌の立つような戦きを感じたのです。街灯の光りに夜陰から浮びあがつているヴェッキオ宮の重々しい石の壁がさざ波のようにゆれ動いているのです。そしてここシニョリア広場において

十五世紀末、多くの聡明で繊細でかつ偏狭で狂信的なフィレンツェ市民を前にして「虚栄の焼却」を行い、自らも四肢に釘をうたれ、同じ場所で焚殺された怪僧サヴォナローラのうめき声が、ゆれ動くその壁に不協和に響くのを感じたのです。そして同時に昼間ウフィッツィ美術館で観たポッティチェリの『ヴィーナスの誕生』のヴィーナスの愁いにみちた顔が、或は『春』の裸身の女達の悲しみの顔がはつきり想い出されてきたのです。ポッティチェリのこの代表作を実際に観る前にこの絵に抱いていた明るい印象は全くの幻想であつたのだとウフィッツィで思いしらされた時、実はその真因が掴み得なかつたのですが、今シニョリア広場で思わず戦き慄えるに及んで何か『ヴィーナスの誕生』『春』の暗さの因縁みたいなのものが解つてきたような気がしました。ルネサンス初期の画家ポッティチェリは人間の官能美、自然の躍動美を新しい時代の価値観のもとに描こうとしたのです。しかし彼は新しい時代に入り切れないで、いや新しい息吹の真只中にいるが故に大いに苦悩を嘗め彷徨つたように思えるのです。彼の生来の弱さは、ルネサンス初期という時代のカオスの中に滅びることさえ妨げたのです。滅び得ず生きなければならなかつた彼はそれなりに虚しく

はあつても絵筆をある時は力強く握つたのです。せい一杯ポッティエリは新しい時代の波間にヴィーナスを描き続け、春を謳つたのです。しかし混乱したフィレンツェに一種のカンフル剤として登場してきた予言者サヴォナローラの厳格なる宗教政治の前に、ついに彼は自らの絵とそして彼自身を火焰の中に投げ出さざるを得なかつたのです。ヴィーナスの愁いの顔はそれを予告していたようにも思えます。そしてそのサヴォナローラさえ、カオスの激しい風雨の中で火あぶりにされてしまつたのです。誰もが時代の黎明に背を向けられず、かつ必然的に生じる混沌の渦の中で苦悩せざるを得ないのは、現在でも同じであろうと思いますが、特にヨーロッパ・ルネサンス初期のそれはその息吹が激しいが故に大きいものであつたように感じられるのです。そしてフィレンツェはまさにその混沌と苦悩の最大の生産地であつたように思えるのです。現在のヨーロッパの苦悩の原基点がイタリアの花の都にあると小生が考えた所以なのです。

確かにフィレンツェは明るく美しい都です。しかしその底にうごめいていたものは流血と憎悪と裏切り、そして創造と信頼と愛との相剋であつたように思えます。もつとも現在フィレンツェ市民が、特に今日のような現状

下で何を思つて生活しているのかは、一観光旅行者である小生には残念乍ら察知しがたいことでしたか……。(この項の一部フィレンツェ市民観については、会田雄次氏の御意見参考)

◇
一観光旅行者である小生には察知しがたいことがらがあまりにも多くありました。駆け足の小旅行者にとつてヨーロッパ人のリアルな生き様に触れるなんてことは到底無理なことです。だからそれ故一種の旅のどこかしさを一方では感じるのです。今春ヨーロッパを訪れた頃はイギリスでは炭鉱ストに続く労働党少数内閣の登場、西ドイツではブランド首相の引退直前、フランスではポピドールの重体説等、そういう政治情況下に加えヨーロッパ全体が石油危機、極度のインフレに悩まされてしました。しかしこうした生々しい世情不安を全く肌で触れることなくヨーロッパを旅する時、どうしてもいらだたしいもどかしさがつきまとうのです。せいぜい暗きシヨウインドルに電力節減のいたましさを感ずる程度でした。苦悩せるヨーロッパをこの眼で、なんて目的をなまじつかもつていた小生にはどうにもふつきれない心境になつたものです。

でも、どだいおのぼりさんの海外旅行、もともと目的なんて大上段にふりかざして旅する方が間違つていまし

た。どうせ遊びだ、気らくにいくべきものだったのだと思いました。よく英会話をテープで練習し現地人と少しでも話し、現地人の心理の機微に触れようと旅行前一生懸命になつている人がいるようですが、そんな時間があつたら森鷗外の小説でも読んでいた方がよつぽどましではないかと思うようになりました。

でも、我等近代日本の文明のふるさとヨーロッパについて何かを知りたいのだという衝動はどうにも消すことが出来ず、その辺で又々頭を悩ませます。

でも、偉そうに「ヨーロッパ文明」を探り、そして語る前に本当に日頃しておかなければならないのは、ある止揚された（偏頗でない、無国籍でない）「日本文明観」をもつことではないでしょうか。むしろそうすることこそ案外真の国際人として生きられるのではないかと愚考しています。小生はそれをヤング達に期待しており、そして期待するばかりに、オイルかすがつまつた交通法規にやたらと通じそれでいて、いやそれが故に運神のないドライヴアーのような「狂育者」に彼等を委せてはおけないのではないかと……とふと考えたりするのです。不遜乍ら小生みたいな「教育者」こそが案外その勇氣ある無責任さをもつて彼等に対していけるのではないかと思つたのです。

（爆笑・嘲笑・冷笑）、憶面もなくかくいえる厚顔無恥なる小生、実は小心なる小生、何だか背中がジン麻疹のせいかこそばゆくなつてくるのを覚えまして……………。

（一九七四年九月記）